

# 計画案の夢

アンピルト・プロジェクト

アトリエCOSMOS

'93~'95

④

鎌倉・小町計画

文=白鳥健二  
写真=大橋富夫

砂山の向うで海鳴りがしている。  
サーと/or/音や、ゴーと/or/音が聞こえてくる。しかし、聞こえてくるのは、サーとか、ゴーという音だけではない。  
よく耳を凝らしていると、サーと/or/音らしい者もすれば、シャーッと/or/音、少々甲高い音もある。

更に耳を澄ましてじっと聞いてみると、サーとか、シャーという音の合間に、かすかな、しかも優しい音まで耳に入ってくる。

砂山の向うで、さきから海鳴りがしている。  
サーと/or/音や、ゴーと/or/音は遠方から聞えてくる。沖合いの、無数の波頭の崩れる音が確然一体となって聞えてくる。

しかしサーという音や、シャーという音は、そうではないようだ。近くで発生している。サーと/or/音は、すぐその脇に潮が寄せてくる時に、浅瀬の底をサーと/or/音の時に発する音らしい。勢いは良いかどうかなく軟らかい。

シャーという音はその反対で、とても高めしく、妙に甲高い。サーと/or/音が素早く引いていく時に、海底の砂の中に埋った鳥の貝殻が表面に激しく洗い出され、シャー

ツという甲高い音を発生させている。  
更に短い、かすかな音の正体は……と考えてみると、よくわからない。浜辺に寄せて来た潮が引く瞬間、一瞬静止状態となる。その時、波の泡がはじけたる、それが、乾いた砂で埋もれていく。その音なのだろうか。あるいは想像もつかない全く別の音なのだろうか。

砂山の向うで海鳴りが突然消えた。  
ほんの一瞬、全ての音が消えた。  
え…? 一体何が起つたんだ? サーでもなければ、ゴーでもない、もちろんサーでもなければ、シャーでもない。

すぐに立上って、砂山の向うの海を見ると、サーの正体である沖合いの大波の崩れがない。ゴーの正体である音せぐる波と返す波のふつかり合いもなく、従って波打裔のサーもシャーも発生していない。(一瞬、全てがハイタリと止んだのである。全てが停止するこの偶然の出来事が、一日どの位の割合で起きるのかと考えていろいろに、また海鳴かはしまった。) もうそろそろ帰らうかな。

新潟県角田浜にて



## 鎌倉・小町計画

—アプスに吸い寄せられて—



形態は、私にとっての空間の原点のひとつと言ってもよい。その後、世界各地特にヨーロッパ、中東諸国を旅しながら、数多くのパリカ式の教会堂のアプス、あるいは、イスラムのモスクに見られるイワーンを見るたびに、これらの空間のもつ特性である人を引き寄せる「吸引力」つまり何もかも、全てを平等に呑み込む偉大なる「力」を感じ、更にこの思いを強く持ち続ける結果となった。

ひとつのものが、相反する二つの特性を同時に合せ持つ。内側の求心性、そして外側の遠心性という二つのもの、すなわち「陰」の力と「陽」の力の相反する属性が表裏一体となって、ひとつの空間を成立させている。

誠に調和のとれた形態である。

鎌倉を多少ご存知の人なら誰でもお馴染みの小町通りである。JR横須賀線鎌倉駅より、鶴ヶ岡八幡宮に向う最も人通りの多い道筋である。計画案は、この通りに面した一角に建設予定で設計された商業施設である。

建物の正面開口の両側の外階段は、八幡宮の本殿へ至る、あの大銀杏の脇の石段のようでもあり、あるいはまた、遠くメキシコ・ユカタン半島に点在する古代マヤ文明の石造遺跡である階段ピラミッドのように見えないでもない。建物の最上階にはアプスがある。ユカタン地方では、この部分を、マヤアーチと呼んでいる。

アプスとは、球形をタテ、ヨコ1/2ずつ分割して出来た空間で、古代ローマ時代のパリカ集会場における身廊の正面奥に設けられた1/4球形の空間のこと。もとは新石器時代、サルディニア島の地下の聖所の、メガラと呼ばれる空間にその起源を持つと言われている。古代ペルシアでは、建物のファサードに大きなアーチ開口部を作り、その周囲を四角く枠取りしたものをイワーンと呼ぶ。アーチ内部はヴォールト、またはドーム天井で覆われ、半外部の空間となっている。これもアプスと類似したものである。

私が初めてアプスに出会ったのは、1967年、建築家パオロ・ソレリのCOSANTI(スタジオ)アメリカ・アリゾナ州、フェニックス近郊)であった。砂漠にひっそりと建ち並ぶソレリのスタジオ建築群の中で、ひときわ引き寄せられる空間、頗る大きな口を開けてこちらを向いている…そんな格好をしたアプスを初めて見た時のこと。今でも忘れない。

夏の強烈な太陽の日差しをたくみに遮り、乾燥した涼しい風を誘い込む半屋外のアプス、パオロ・ソレリのこういう空間に囲まれて2年間生活するうちに、アプスは、私の体の中に深くしみ込んでいった。春夏秋冬、めぐらしく変化する気候に、みごとに対応するアプスの



▲計画案  
大中小三つの相对するアプス  
が互いに引き付け合う  
(1993年、アトリエCOSMOS作成)



▲模型・小町計画案



人々は、無意識のうちにそれぞれの思いをどこか遠くに離せている。あたり一面に広がる紐帯の力の水平線を見ながら、うつろな時を過ごしている。言葉にならない世界、漠然としたことを夢想している。空虚だった心に何かが注入された時、人々は昇って来た階段を降りはじめる。

—マヤ遺跡(メキシコ・ユカタン半島)トゥルム神殿境内にて

人々を無意識のうちに吸い込む。  
老若男女も、無人も、悪人も、皆平等に呑み込んでいく。アプスは、こんな慈愛深い力を保有しているのである。

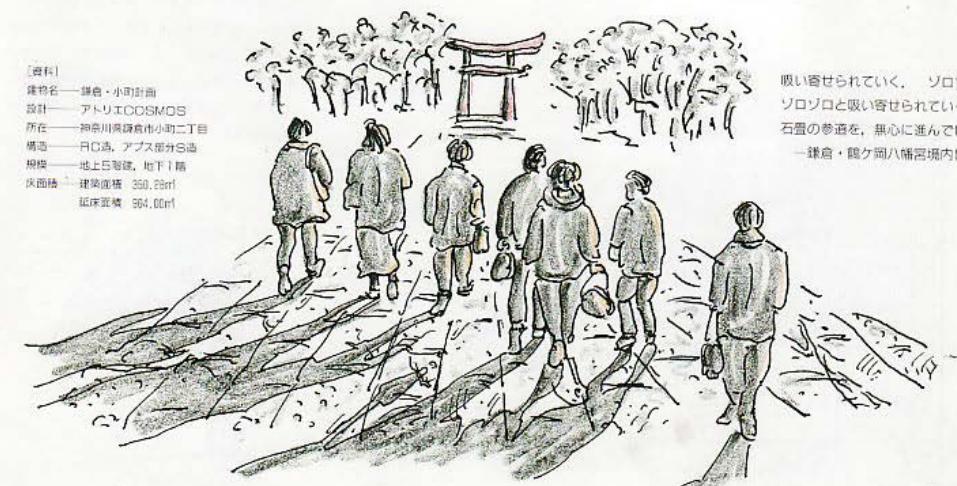
—アリゾナ、ARCOSANTI(パオロ・ソレリ設計)幻想—



△計画案屋根伏スケッチ

階段を昇る、息をはずませて、ひたすら階段を昇る。天辺を目指して、一段一段階段を昇る。天辺のわずかな場所でひとときを過す、放心状態で、ほんのひとときを過す。

—己階テラス付近より  
アプスを見上げる—



吸い寄せられていく。ソロソロ、ソロソロと吸い寄せっていく。石畳の参道を、無心に進んでいく。一鎌倉・鶴ヶ岡八幡宮境内にて—